

## ギリシヤの子どもたちの日常

マリア・パプスターヴル（外国語講師）

翻訳・構成／松田こずえ（大学院生）

ギリシヤにおける義務教育は、5歳の幼稚園から始まる。6歳で小学校、13歳で中学校、16歳で高校、18歳で法律上は成人を迎え、大学に進学する。子どもたちにとって重要であると考えられていることは、「遊び」（遊具、方法、冒険）と、「学び」（学校、ルール、知識）である。

## 幼児期の子どもたち

ギリシヤでは外で仕事をしている両親が多く、子どもたちの多くは5歳の幼稚園入園前は保育園や私立のナーサリーに通う。金銭的な理由により祖父母の家に預けられる場合もあり、その数は次第に増加している。保育施設への通園経

験がある子どもは、幼稚園入園後も容易に園の生活リズムやスケジュールに合わせる事ができる。しかし祖父母に預けられていた場合には子どもの経験は不足しがちであり、「社会化」が遅れる心配がある。

子どもたちは通常7時45分から15時頃までを保育施設で過ごし、帰宅後に別の習い事に出かけることはあまりない。親が疲れるため、子どもを連れて再度、外に出かけたいとは思わないからである。その結果、子どもたちは、家に遊び相手も話し相手もなく手持ち無沙汰で、結局はテレビの前に長時間座り続けることになるか、もしくはタブレットを手に、年齢に合わな

い内容の番組や情報を見続けることになる。夕食後は通常、早い時間に就寝するが、日によって遅い時間まで起きていることを許されることもあり、その場合は、翌日に眠たい目をこすりながら、保育施設での活動に渋々参加することになるのである。

## 家庭の様子

ギリシャの幼児は、保育施設や幼稚園に通う以外の時間は、両親や祖父母と一緒に、教育的に有意義に過ごしていると考えられている。

5歳で幼稚園に入園すると状況は変わる。教省によって、幼稚園は朝8時15分から13時までと定められている。年齢に応じたカリキュラムに則っており、特に小学校に向けた準備教育が重視されている。幼稚園とは別に、習い事をさせる親もいる。これは子どもが小学校入学後に困らないように準備するためであり、例えばスポーツ（サッカー、バスケットボール、スイミング等）、芸術（歌、ダンス等）などである。しかし、子どもとの小旅行や、遊び、活動を共に体験しようとする親はほとんどいない。質の高い時間を子どもと一緒に過ごすことの重要性について理解している親が少ないからである。

集団保育の場で子どもは同年齢の友達と共に社会を築き、新しい素材に出会い、実際に手を動かし製作し、課題の解決に興味をもって取り組んでいる。親もそのことを理解してはいるが、残念ながら、家庭においても同じような過ごし方を心がげるかという点、必ずしもそうではないのが現実である。子どもらしく遊び、会話し、歌い、体を動かすことを歓迎することもない。むしろ、親が子どもに要求することはその逆である。「大人は忙しいのだから」邪魔をせず、じっとしているようにと言いかせるのである。これはエネルギーと好奇心に満ちた幼い子どもにとって、到底無理なことであり、結局、親は子どもにテレビやタブレットの画面を与え、それを見せて静かにさせることになる。

## 小学校入学後の子どもたち

年齢が上がるに従い、ギリシャの子どもたちには自由な時間が少なくなる。小学1年生のときに、ほぼ全員の子どもが英語の課外レッスンを受け始め、中学卒業もしくは高校初期まで継続する。相当な時間が英語習得のためにつぎ込まれる。中には第二外国語（多くはドイツ語もしくはフランス語）のレッスンを追加で受ける生徒もいる。語学以外にも、ほぼ全員の子どもが、サッカー、バスケットボール、スイミングなどのスポーツ活動や、絵画、歌唱、ダンスや楽器などの芸術系の活動に参加する。課外活動を増やした結果、子どもたちは常に多忙であり、十分な休息、睡眠や、満足いくまで遊ぶための時間などは残されていない。わずかな空き時間にはタブレット等の画面を見て過ごし、それをささやかな息抜きとするのである。これはテクノロジーに慣れ親しんでいる現代の子どもたちを思えば、ごく当然の姿であるだろう。

中学校や高校では、授業時間が増えるのに加え、試験のために学校外での課外授業も必要になり、長時間机に向かう生活になる。必然的に、習い事を辞めざるを得なくなり（または習い事を続ける場合には、なおさら学校の勉強に熱心に取り組む必要がある）、進級試験に合格するために必死に勉強する。山場は高校最後の卒業試験であり、この期間には子どもたちは大きな不安とプレッシャーを抱えて過ごしことになる。今日での状況は悪化している。ギリシャにおける学校は、生徒にとつてさえもその信頼が失われつつある。学校を退屈な場であると感じ、「真面目に励む」ことや「成功する」、または「夢をつかむために」といったことを考えようとしていない生徒が増加している。自分の将来設計について真剣に考えようとしない。熱心に学業に励むことを生徒に期待しない教師と親にも、責任の一端はある。日常的に学校の規則を破り、簡単な手続きにすら従わない生徒もいる。

## 私の願い

全般的に見て、ギリシャの子どもたちの日常生活はおそらく最善のものとは言えないが、子どもたちはそのことに気づいておらず、改善を試みようとする人もいない。仮に子どもたちの親が、より多くの機会を子どもたちに提供しようとするならば、状況は異なるのかもしれない。

ギリシャの子どもたちは、子どもであることを少しづつ忘れつつあるのではないかと私は考える。このことは私の母国であるギリシャのみならず、世界中の子どもたちに当てはまると危惧している。子どもたちはますます遊ばなくなり、自然や子どもたちを取り巻く環境から離れていく。テクノロジーに依存しているため、年齢や精神的、心情的な成長段階にそぐわない内容のもの、つまり、戦争、暴力、苦痛、虚偽、恋愛などの内容に触れることになる。これらにより、子どもたちの価値観、感情や理解、人の会話やかかわり方は影響を受けることになる。

その結果として、子どもたちは心からの幸福感や笑い、友情、楽しさを味わう機会を逃し、ますます孤立し孤独な生き方を受け入れていくのである。子どもらしい無邪気さに別れを告げ、自分の個性を磨くより前に、自分らしさそのものを失っていく。

私は次世代や私たちの社会の未来のために、状況が少しでも良くなるようにと願っている。つまり「子どもたちはそれぞれ違う種類の花であり、みんなで一緒にこの世界を美しい庭園にする」こと。それが私の望みである。願わくは、子どもたちという花々がこの先、もっと大切に育てられ、子どもたちの望むままに可能性という花びらを開かせ、それぞれに大輪の花を咲かせることを……。